在野貫き 開いた孤高の領域

歴史家・萩原延寿さんを悼む

杉山　伸也
（慶応大学教授）

歴史家萩原延寿さんが逝ってしまった。七月中旬に入院されてから三カ月余だった。足かけ十五年、実質十年にわたって『朝日新聞』に連載されていた『遠い崖――アーネスト・サトウ日記抄』全十四巻の完結をたしかめ、そして八月に期せずしてさきに逝かれた宇多子夫人のあとをおうように旅立たれてしまった。

萩原さんは、年令差にかかわらず、つきあう人は「友人」と考えていたので、「萩原先生」ではなく、「萩原さん」とよばせてもらおう。はじめて萩原さんにお会いしたのは、僕が国際交流基金で編集の仕事をしていた七五年の春のことだった。その後、『馬場辰猪全集』（岩波書店）の編纂や、イギリスにあるサトウ関係の資料の収集をお手伝いした。関心が、ともに幕末・維新期にあったことも、親しくさせていただく要素だったかもしれない。僕がイギリスに留学したときには、多くの萩原さんの友人を紹介していただいた。その広がりは、学者だけではなく、政治家、新聞記者、音楽家、会社の経営者などじつに多彩で、どのようにしてこうした人脈がつくられたのか、不思議に思えるくらいだった。

僕がイギリスに長期滞在している間に萩原さんが来られたときは、よく車で萩原さんの旧友めぐりや一度いってみたかったというレストランなどを一緒に回った。ロンドンのロナルド・ドーアさんのフラットに滞在していたときには、宇多子夫人が詳しく書いてくれたレシピをみながら、僕と妻のヘレンにチャーハンをつくってくれた。予想をはるかにこえて美味しかった。

リベラリズムとジェントルマンという英国の伝統をもちつづけることが、萩原さんの美学だったように思う。ジャケットやコートも、ハロッズの十四番の紅茶もふくめ、イギリスを心から愛していた。イギリスが、萩原さんにとってもっとも心の安らぎをおぼえる地だったのかもしれない。この原点は、五〇年代末から六〇年代初めにかけてすごしたオクスフォードの独特の雰囲気、ウィスキーやパイプが萩原さんの生活の一部になったのも、ここからなのだろう。

「バブル以後、無限の成長はあり得ないことが分かってきた」と語る萩原延寿氏＝96年

萩原さんは、在野の歴史家をつらぬきとおした最後の人だといえる。馬場辰猪、陸奥宗光、東郷茂徳、そしてアーネスト・サトウの評伝を通して、評伝に、文学性と歴史性だけでなく、これまでになかった学術性をつけ加えた新しいジャンルを切りひらいた。これは、萩原さんの豊かな感性と経験のゆえに可能だったことで、ほかの誰にもふみこむことのできない孤高の領域である。

講演はあまり得意ではなかったが、萩原さんの文章・表現力の気品と感性はほかの追随をゆるさない。しかし、なかでも萩原さんがもっとも共感をおぼえたのは、馬場辰猪をおいてほかにない。イギリス留学時代だけではなく、帰国後の社会や生活環境という意味でも、萩原さんと馬場は、あまりにも重なりすぎている。

亡くなられる三日前の日曜日の午後、妻と病院をおとずれた。この日は、週末に容態が一時的に悪化したことを感じさせないほどお元気で、酸素マスクはつけていたものの、眼もかがやき、はっきりとした口調で、疲れもみせずに長い会話をした。萩原さんは、僕をみるとすぐに「杉山くんは、よくくるね。最近、お見舞いにくる人が多くなったのはなぜだろう」と、一瞬言葉につまるような質問をなげかけた。たしかにその四日前にも、ロンドン大学のイアン・ニッシュ先生と一緒に、お見舞いにきたばかりだった。

萩原さんのいだいている不安や、イギリスでの生活や友人のこと、パンティング（ボート遊び）のことなど、完璧な英語で話しつづけた。この日は、午前中には二度ほどおきあがろうとして点滴をはずし、看護婦さんに迷惑をかけていたという。そのとき書いたのだろうか、ノートの裏表紙にはサインペンで「あきらめず」と走り書きされており、「僕が書いたんだ」という。

僕には、アメリカで客死した馬場辰猪が最後に書いた「頼むところは天下の輿論　目指すかたきは暴虐政府」という言葉と重なり、「馬場には、このことばの中に、自身の生涯が要約されているように思えた」という萩原さんの文章を想起させずにはおかなかった。

ヘレンはかるく萩原さんの手に唇をあて、僕は萩原さんの大きく熱い手と握手をして、僕らは別れた。